

# フィリピン・ビサヤ地域における干潟の漁撈採集に関するレビュー

辻 貴 志

Takashi Tsuji

佐賀大学大学院農学研究科・特定研究員

**要旨：**フィリピン諸島中部に位置するビサヤ地域の干潟では、零細漁民による身体や単純な漁具を使った漁撈採集が重要な生業である。干潟とは潮の干満を利用した漁撈採集が繰り返られる空間であり、ビサヤ地域では筍漁のほか、潜水漁や採捕漁が盛んである。干潟の生物もまた多様であり、漁撈採集はそれらの習性を反映した性質を有する。零細漁民の多くは沖合に出る機動力にとほしく、干潟での漁撈採集に生業を特化した人びとである。本論では、漁撈採集が生物をとりつくしえない零細漁民の身体的および生態的技能に根ざしているとの仮説を立証するために、ビサヤ地域における干潟の漁撈採集に関する先行研究をレビューし、干潟の漁撈採集の成立要因を検討した。結果、ビサヤ地域の漁撈採集は、生物や自然に関する深い理解によって成立し、干潟に寄り添って生きる零細漁民の生計基盤を担保していると結論づけた。

**キーワード：**漁撈採集、干潟、零細漁民、ビサヤ地域、フィリピン

## 1. はじめに

海辺にくらす人びとにとって、干潟は生活の糧をえる場所であり、その豊穡さは人びとの暮らしを支えてきた。干潟での漁撈採集は、満潮時は漁具や舟りを用いた男性の活動であり、干潮時は素手を要する程度のおもに女性や子どもの活動である。

漁撈採集には、「身体的技能」および「生態的技能」を要する。「身体的技能」とは、「景観の重なりを眼という身体で認知し記憶する」ことであり、「生態的技能」とは「資源の生態や習性を知識として持つこと」を指す(篠原 2005: 178-179)。このような技能は、「漁場の海底地形や底質、潮汐現象、風向きや季節風の状態や特徴、漁獲対象となる魚の習性を深く観察し、詳細な民俗知識を蓄積」(高橋 2018: 231)することと換言できる<sup>2)</sup>。

本稿は、フィリピンのビサヤ地域(図1)における干潟での漁撈採集に関する先行研究のレビューから構成される。同時に、海と人間との関係を広くとりあつかう海洋人類学の領域に位置する。本論では、まず干潟の特性を概観し、そこが人びとの漁撈採集の主要な場であり、生物が育まれる空間であることを確認する。そのうえで、筆者によるマクタン島での研究を含む先行研究をレビューする。そして、ビサヤ地域の干潟における漁撈採集の成立要因を描き出すことを目的とする。

筆者は、マクタン島において、2000年5月から2018年9月にかけてウツボ筍漁、潜水採貝漁、ホシムシやタツナミガイの採捕漁といった干潟での漁撈採集に関する生態人類学的な調査を計10回実施した。その結果、干潟での漁撈採集には、干潟の生物を乱獲しえない零細漁民の身体的および生態的技能が深く根ざしているとの仮説を立てた。

干潟はだれでも簡単にアクセスできるコモنزの空間であり、零細漁民だけでなく沿岸の一般の地域住民もまた頻繁に採捕を中心とした活動を繰り返す。生物のとりすぎの問題だけでなく、なかには生態環境に深刻なインパクトをあたえる違法な漁撈に従事する人びともいる。干潟は人びとに生活の糧を供給してきたが、今日、その環境破壊が危惧されている。干潟の機能を維持するための慣習や法律はフィリピンでは効力にとほしく、零細漁民を利することはない。このような環境下における、零細漁民による自然と調和した漁撈採集について検討しておくことは人類学にとどまらず、環境保全や資源管理を対象とした他分野の研究にも資するであろう。

## 2. 干潟

干潟(tidal flat)とは、干潮時の水面と満潮時の水面の間の場所である。そこでは、満潮時は完全に水中に沈み、干潮時は完全にみえる部分が出る。潮汐は、月と太

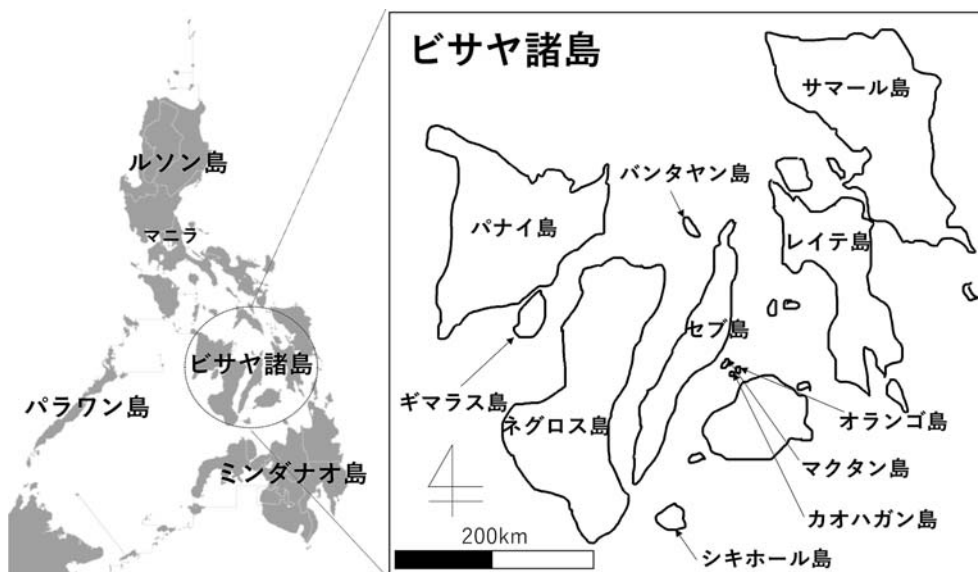


図1 ビサヤ地域の位置（筆者作成）

陽が地球上の全海洋の海水を引っ張る引力により1日に2回生じる。地球、月、太陽が一直線に並ぶときが大潮であり、おたがい直角に並ぶときが小潮である。大潮と小潮は、約29.5日の周期で繰り返される。

干潟とその周辺は多種多様な生物の棲息空間であり、環境保護機能、環境浄化機能、景観機能、生物生産機能が成立している。そして、あふれるほどの生物がにぎわいを生み、活発な食物連鎖を繰り返す。生態系の有機物の分解と循環を担っている。同時に、陸地から川をとおしてリンや窒素といった栄養塩が多く運ばれ、栄養塩をエサに植物性プランクトンが大発生し、それらをエサにしてさまざまな生命が育まれる。このように、干潟の発達により、人類は必要とする生物をえられるようになった。

いっぽう、干潟は平坦な砂泥質で周囲の水界が浅く、波浪から遮断された穏やかな場所であり、生物の乱獲や沿岸開発のほか、アクセスしやすく人口密度が高いことから踏み荒らされ、人間生活の負のインパクトを強く受ける。干潟で小中規模の漁撈採集をおこなうと、生物のとりすぎによる「成長阻害（growth overfishing）」が生じ、個体群のサイズの小型化がみられるようになる。さらに、大規模に漁撈採集をおこなうと、個体群を維持できないところまで数が減ってしまい、とりすぎによる「加入阻害（recruitment overfishing）」が起きる（ラファエリ／ホーキンス 1996：54）。

干潟は、岩場、藻場、砂場、サンゴ礁から構成され、マングローブ林もみられる。たとえば、矢野（1992：48）は、ビサヤ地域のパナイ島の海浜生態系を、「干潟エコ・システム」（マングローブ沼沢域）、「珊瑚礁エコ・システム」、「砂浜エコ・システム」（広大な砂底）

にわけている。これは漁撈技術の類型にもとづいた分類であるが、本稿があつかう干潟をおおよそいいえている。本稿では、干潟を「潮の干満を利用した漁撈採集が繰り返られる空間」と位置づける。

### 3. 漁撈採集

フィリピンでは、漁業<sup>3)</sup>は、商業漁業（commercial fishing）と地先漁業（municipal fishing）に大別される。商業漁業は巨額投資による漁具の効率化と近代化を図った漁業形態であり、巾着網、巻網、底曳網といった大型の漁具と船を用いる。地先漁業では、刺網や釣針のような簡素な漁具を使い、3トン以下の舟で零細漁民（small-scale fishermen）が操業する。

漁業は男性の従事者が大多数を占めるが、漁撈採集（fishing and gleaning）には女性や子どもが多く参与する。しかしながら、女性や子どもの家族労働としての漁撈採集は漁業統計に反映されず、女性の漁撈採集へのとりくみと生産高は過小評価され、不可視の存在とされてきた。ビサヤ地域では、漁撈に女性が参与する事例が確認できるが、基本的に女性は干潟において、貝、ウニ、ナマコ、海藻といった生物の採捕に従事する。漁撈採集は、男の世界にとどまらず、むしろ日々の栄養と家計経済を補填する女性や子どもに制限された部分が少なくない。また、地先の海域を利用する受身型漁業や農民漁業のような技術的に未熟な段階にとどまる。

本稿では、以上のことから、漁撈採集とは、程度の差はあるが、「零細漁民が、干潟を利用し、男女問わず、たいした道具を用いず、みずからの身体的および生態的技能を利用して生物をとり、生産から消費までを担う自

給自足的な生業」と定義する。

#### 4. ビサヤ地域の干潟における漁撈採集研究のレビュー

ここで、ビサヤ地域の干潟における従来の漁撈採集研究とあわせて筆者のマクタン島での調査結果についてレビューする。これらをまとめると、ビサヤ地域における干潟の漁撈採集研究は、考古・歴史的研究、ビサヤ漁民研究、漁法・漁具研究に大別できる。

##### 4-1. 考古・歴史的研究

ユンカーによる考古学的研究は、14～17世紀のビサヤ地域のネグロス島で、海産貝類が内陸部の人びととの共生的交換関係の一端として交易された（Junker 2000 : 254）。ガロンの考古学的研究によると、16～17世紀のセブ島では、漁撈と貝類の採捕が人口を支えるタンパク源獲得のための重要な役割を果たしてきた。同時に、海産資源は人びとによって猛烈にとりつくされた（Garong 2013 : 168）。スコットの歴史学的研究によれば、16世紀のビサヤ地域では、網、罟、えり、釣針、銛を用いた漁撈がおこなわれていた（Scott 1994 : 45）。

##### 4-2. ビサヤ漁民研究

ビサヤ地域で専門的に漁業に従事する人びとは、「ビサヤ漁民」と呼ばれ、その漁業技術、移動性、文化がおもな研究対象となってきた。具体的には、漁業や農業をはじめとする生業、パトロン＝クライアント関係に類似するスキ（suki）関係、移動、市場、漁獲物流通網、沿岸資源管理、物質文化、性的分業、宗教、親族、土地所有制度といった多様なテーマで研究がおこなわれてきた（Spoehr 1980 ; Szanton 1971 ; Szanton 1972 ; Ushijima and Zayas eds. 1994, 1996, 2000 ; Zayas et al. eds. 2014）。これらの研究では、スキ関係の調査が大部を占め、漁業のなかでも漁撈採集に関する研究は少ない。

矢野とデ・ラ・ペーニャによると、パナイ島では、1970年代に生じた漁撈の近代化が原因で、漁撈の動力化と漁網のナイロン化が生じ、沿岸域の漁具を軽視し沖合で使用する漁具を用いた漁法に特化した。結果として、舟のガソリン代や漁具の構築に経費を要することから、沿岸域のえりや敷網といった設置漁具の方が経済的に評価され（Yano and de la Peña 1996 : 173-174, 176）、漁撈の近代化が浸透するなかで沿岸域における漁撈採集の重要性が示された。ここでは、土壌の質が農耕に適さないことから、男性は漁撈採集に積極的に従事する（Yano and de la Peña 1996 : 176）。

パナイ島のビサヤ漁民に関する矢野の研究は、漁民が

漁場環境のちがいと特性を活かした多様な漁撈採集をおこない、潮の干満、月齢、潮流、風向き、季節、サンゴ礁と礁湖の命名、魚類の生活形、山あてといった海洋環境についての民俗知識に熟知していることを詳細に書きとめている。いっぽうで、ムロ網やダイナマイト漁といった違法漁業や、漁撈採集の不確実性に起因する貧困問題についても記録している（Yano 1994 : 16, 18-39, 44, 46-47）。これらは、フィリピンの干潟域でほぼ共通して生じている環境問題であり、筆者はフィリピンでの広域のフィールドワークの結果からその事実をつきとめている。

##### 4-3. 漁法・漁具研究

漁法に関する先行研究として、セブ島の地先で108種に上る延縄漁の漁獲魚種構成、時間・地域ごとの効率性と生産性を示したドミニサックとラウによる研究が挙げられる（Dominisac and Rau 1979 : 31-44）。この研究は、漁獲対象の魚種の豊かさと、漁民の時間と空間利用を明らかにした。

ビサヤ地域において潜水漁具である水中銃に関する物質文化的記録は確認できるが（Cadelina 1986 : 223-226 ; Calderon-Hayhow and Mascuñana 1994 : 433-434, 460-461 ; Umali 1949 : 6-7）、潜水漁の実態を示した研究は少ない（辻 2015）。

釜を用いた漁法は多様かつ広くおこなわれている。さまざまなタイプの釜が確認できるが、ここではウツボ釜に焦点を当てる。ブコル、カデリーニャ、カルデロン＝ヘイハウとマスクニャーニャによると、ウツボ釜を使った漁法はシキホール島やネグロス島でみられる（Bucol 2016 : 5-6 ; Cadelina 1986 : 212 ; Calderon-Hayhow and Mascuñana 1994 : 430-431, 458）。ワゲイとブコルの研究は、釜をはじめ消失しつつある在来の漁撈採集技術と知識について生態学的見地から記載した（Wagey and Bucol 2016 : 117）。

採捕も重要な位置を占める。フィリピンでは、採捕による単位労働量当たり漁獲量（catch per unit effort : CPUE）は、女性が男性を上回ることをデ・グスマンは解明し（De Guzman 2015 : 35）、採捕が女性にとって優位な漁撈採集であることを裏づけた。レイテ島周辺小離島におけるショッペらの研究は、漁撈採集がたいした道具や干潟の生物についての知識を必要としないこと、大人はいつでも特定の生物をみつけれられるのかを正確に知っていること、漁撈採集への子どもと若者の参加が認められること、人口増加による生物への圧力が原因で漁獲量が減少していることを明らかにした（Schoppe et al. 1998 : 130-139）。

ビサヤ地域を含む、フィリピン固有の漁具の分類に関する研究は相当な蓄積がある。ウマリはフィリピン国内の漁具の体系的なおこない、手道具、設置漁具、釣漁、網漁に分類した (Umali 1950: 6-7)。スぺアーによると、これらの漁具は 16 世紀のスペイン人の到来以前から幅広く利用されていた (Spoehr 1984: 32)。ウマリとウォーフィルは、ダイナマイト漁や魚毒漁といった危険な漁法についても言及した (Umali and Warfel 1949: 2)。以上のウマリらの全国的な研究は、ビサヤ地域の漁具研究にひきつがれている。カデリーニャによるビサヤ地域中部における漁具の物質文化的研究は、漁具を釣針類、タケ製漁具類、水中銃類、舟類にわけた (Cadelina 1986: 203-231)。カルデロン＝ヘイハウとマスカニャーナによるネグロス島の漁具の研究は、漁撈物質文化を舟と漁具に大別し、後者については釣漁、網漁、魚釜漁、石干見、水中銃、そのほかに区分した (Calderon-Hayhow and Mascuñana 1994: 393-464)。川村とバガリナオは、パナイ島の小規模漁具および漁撈について今日ではおこなわれなくなったものを含め詳細に記載しており希少な資料である (Kawamura and Bagarinao 1980: 81-121)。セブ島の小規模漁法をあつかったラウの研究は、干潟での漁撈採集に特化しており、手づかみおよび単純な道具による漁、爆弾・魚毒漁、水中銃・銃漁、釣漁、石干見漁、えり漁、釜漁、網漁 (すくい網、底曳網、曳網、敷網、投網、刺網) といった多様な漁法を網羅し (Rau 1979: 1-27)、それらは今日のマクタン島の漁法とほぼ同様である。ラウはまた、マクタン島における漁撈採集の漁具のほかにも、漁場、漁獲、市場経済状況について簡潔に報告しており、1970 年代のマクタン島の漁撈採集の様子についてうかがいしることができる (Rau 1981: 321-332)。

パナイ島の沿岸漁具と漁法に関する田和の研究は、ほとんどの漁具がタケ材と網を併用したものであることを記録した (田和 1981: 55)。20 年後の再調査において、田和は、タケ製漁具は原型をとどめていたものの、漁網は綿糸製から化学繊維製へと変化した様を報告した (田和 2006: 161)。

石で構築した漁具も利用されている。石干見や陥穽型漁具といった潮の干満を利用して魚介類をとる設置漁具について、ザヤスはネグロス島で多様な魚介類がとられている実用的側面を報告した (Zayas 2004: 59)。ビサヤ地域における石干見の利用は古く、アルチナによると、少なくとも 17 世紀 (1668 年) のスペイン植民地期にさかのぼる (Alcina 2004: 135)。

以上を小括すると、ビサヤ地域の干潟では、簡単な漁具を利用した、あるいは素手による生物の習性に応じた

多彩な漁撈採集が展開されており、零細漁民は有用生物の豊富な干潟を格好の漁場として選択している。いっぽうで、人口増加、漁場のオープンアクセスの問題、干潟の開発による漁場の攪乱も生じており、その持続性と脆弱性が危惧されている。

#### 4-4. マクタン島の事例

以上に挙げた先行研究と相対化するため、ここでは筆者が調査してきたマクタン島の干潟の漁撈採集に関する研究をおもにレビューする。

マクタン島は、セブ島中部南方に位置する。島の土壌は石灰岩質であることから農耕に不向きであり、零細漁民は同島沿岸の広大な干潟を利用する。そして、漁撈採集でえられる生物に生計の多くを依存している (写真 1)。干潟の浅瀬を人びとは歩き (写真 2)、深みでは小型のダブルアウトリガー舟を利用する (写真 3)。

ここでは、主要な漁法は釜漁である。なかでもウツボ釜漁 (bantak) が盛んである。ウツボ (モバウツボ: *Gymnothorax richardsonii*) は、マクタン島の特産品であ



写真 1 漁撈採集でえられた貝 (2015 年 3 月 20 日, マクタン島, 筆者撮影)



写真 2 干潟での漁撈採集の光景 (2005 年 7 月 20 日, マクタン島, 筆者撮影)



写真3 帆をつけたダブルアウトリガー舟（2006年2月7日、マクタン島、筆者撮影）



写真5 タケ製の笊を用いた漁撈採集の様子（2005年7月31日、マクタン島、筆者撮影）



写真4 ウツボ祭りのパレードの様子（2006年2月7日、マクタン島、筆者撮影）



写真6 製作途中のコブシメ用ルアー（2014年9月14日、マクタン島、筆者撮影）

り、例年、同島ではウツボの生産量と漁家の経済状況の向上を期した「ウツボ祭り」が開催される（写真4）。筆者は、ウツボ笊の製作過程について物質文化的研究をおこなうとともに、漁場、時間、資源利用について生態人類学的研究を実施した。そして、ウツボの漁獲の多寡が、漁場利用における身体的および生態的技能と関係することを明らかにした（辻 2007a: 142-143; Tsuji 2013: 171-172）。ウツボ笊のほかにも、アイゴ（*Siganus* spp.）やベラ（*Labrus* spp.）を対象とした魚笊（panggal）、小型のミゾレブダイ（*Leptoscarus vaigiensis*）やテンジクダイの仲間（*Apogon* spp.）とイシガニ（*Charybdis japonica*）を狙った笊（teming）が干潟で利用されている（写真5）。

サビキや生き餌を用いた釣り漁もよくおこなわれており、なかには鉛を溶かしてそれを型にはめルアー（kasag-kasag）を自作し、コブシメ（*Sepia latimanus*）を釣る漁民もいる（写真6）。

網漁の形態は多様であるが、タケ竿で海面を叩き、仕掛けた網に魚を追い込む刺網漁（lambat）が普通に確認できる（写真7）。



写真7 刺網漁の様子（2008年5月27日、マクタン島、筆者撮影）

潜水漁（manaon）は男性がおこなう（写真8）。筆者は、素潜り漁民によるクモガイ（*Lambis lambis*）の採捕について、漁場、時間、生物利用の側面から記録した。おもな採捕対象はソデボラ科（*Strombidae*）の貝類であるが、同時に魚類を水中銃（pana?）で突く。マクタン島ではコンプレッサーやアクアラングを用いた潜水



写真8 潜水漁の様子（2008年5月27日，マクタン島，筆者撮影）

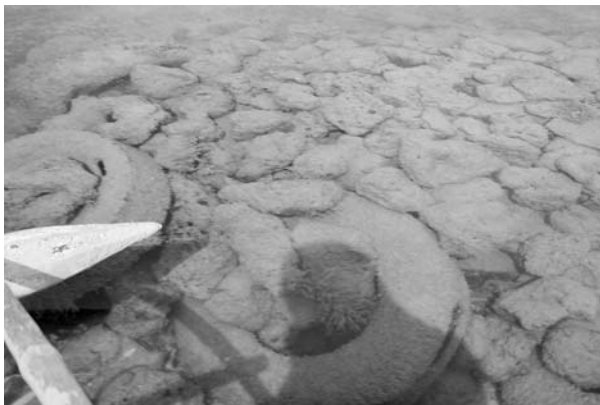


写真9 石干見の様子（2005年7月7日，マクタン島，筆者撮影）

漁もおこなわれているというが，筆者の調査では確認に至っていない。ただし，クモガイをはじめソデボラ科の貝類は，観光客向けのレストランのメニューとなり需要が増加したことで，漁獲量が減少している。零細漁民のなかには，より多くの生物を求め干潟の深みや干潟の外側に繰り出す人びともいるが，安全上および健康上のリスクがきわめて高い（辻2015:95）。

ゴンズイを漁獲する石干見（gango）もみられる（辻2019:38）。石や古タイヤを干潟に積み，一定期間が経つとゴンズイ（*Plotosus japonicus*）がそれらの隙間に入り込むので，干潮時に石干見の周りを網で囲い漁獲する仕組みである（写真9）。

干潟での採捕（mangiyo-os）も盛んである。マクタン島では，おもに貝類，棘皮類，甲殻類，海藻類の採捕が一般的であるが，特殊な採捕も確認できる。たとえば，食用となるホシムシ（*Sipunculus robustus*）やタツナミガイ（*Dolabella auricularia*）の採捕である。それらの生物はたいした市場価値はないが，一定の需要に支えられている。筆者は，これらの採捕に要する身体的および生態的技能を解明すべく調査研究をおこなってきた。ホシ



写真10 ホシムシの採捕の様子（2006年2月7日，マクタン島，筆者撮影）



写真11 夜間に眠っている魚をすくう手網（2005年6月29日，マクタン島，筆者撮影）

ムシの場合，野中らや崎山によるカオハガン島での事例から，海底の砂に空いた穴の形状からホシムシの居所や大きさを素早く推測し，鉋やへらを用いて瞬時に的確に採捕する技能が求められることが判明している（野中2014:139；野中ほか2003:140；崎山1999:100-101）[写真10]。筆者による調査は，これらの研究とまったく同様の結果を示したが（辻2007b:8），より詳細にこの生物の採捕における身体的および生態的技能の構造について分析した。具体的には，眼にみえない砂中のホシムシの棲息地点を探りあて，正確に砂中から採捕する技能の構造についてである。さらに，タツナミガイについては，その採捕活動内容だけでなく内臓の食用慣行についても記録した（辻2019:40-44；Tsuji 2019a:140-145, 2019b:128-129）。タツナミガイの卵の食用慣行についての記録は散見でき，デランやペピトラがその栄養分を分析しているが（Delan et al. 2015:5；Pepito et al. 2015:1），内臓の食利用については現時点でほかに研究事例を確認できていない。





写真 12 工芸用の貝（カイコガイ：*Aliculastrum cylindricum*）を求め干潟の底質を攪乱する人びと（2006 年 2 月 16 日、マクタン島、筆者撮影）

そのほか、夜間にランプを用いて、眠っている魚を手網ですくう採捕（mano）[写真 11] やアナダコ（*Octopus oliveri*）の採捕（mamana）を男性がおこなう（辻 2019: 38）。

以上のようにマクタン島の事例では、広大な干潟を利用した漁撈採集が展開されており、身体的および生態的技能を使った漁法が中心である。この事実は、ビサヤ地域で同様の技能による漁法がおこなわれていることの証左となる。

しかしながら、マクタン島の干潟においても、人口増加による干潟の踏み荒らしや資源の枯渇、リゾート開発、そして漁場の攪乱による零細漁民間の対立が生じており（写真 12）、ビサヤ地域一帯における干潟の環境問題は共通の課題であることが本レビューの結果から明らかである。

## 5. まとめと考察

ビサヤ地域はフィリピンのなかでも多数の島々から構成され、地域の特性に応じた漁撈採集文化が発達してきた。本論でとりあつかうができなかった漁具や漁法は少なくないものの、本稿はビサヤ地域における干潟の漁撈採集に関する概要について先行研究と筆者のマクタン島でのフィールドワークの事例研究をまじえレビューした。その結果、ビサヤ地域における零細漁民の干潟での漁撈採集は、①単純な漁具および身体を介した漁法、②沖合に出る機動力にとほしいことによる限定的な漁場利用、③干潟の生物の漁撈採集により、かろうじて生計が成り立っていると特徴づけることができる。

①については、干潟の多様な環境を反映した単純な漁具が確認でき、とくにタケや石といったコストのかからない素材が選択されているか、熟練した身体的および生

態的技能を用いて漁撈採集がおこなわれている。零細漁民は経済状況が思わしくなく、近代のかつ精緻な漁具を入手することが困難であることから、在来の漁具や漁法に依存せざるをえない。近年、部材がナイロンやプラスチック製材に変化しつつあるが、漁具の構造自体は大きく変わっていない。そのことは、漁具が生物の習性や干潟の自然条件に適応的であることを示唆する。たとえば、タケ製漁具のなかでも、ウツボ釜はビサヤ各地域で構造が類似し、ウツボの回遊ルートを熟知していれば安定した漁獲を維持できる傾向にある（Tsuiji 2013: 178）。また、身体的側面について、ホシムシやタツナミガイの採捕では、これらの生物が棲息する微細な巣穴を瞬時に見抜き、正確に採捕する技能を要する（辻 2007: 8, 2019: 41, Tsuiji 2019 a: 141, 2019 b: 128-129）。このように、生物や自然に関する深い理解にこそ身体的および生態的技能が求められる。零細漁民は、干潟の生物や自然と長きにわたりつきあうことで、これらの技能に修練してきたと考えられる。干潟の漁撈採集は、ユニークな漁具と漁法で構成され、自然や生物に対する研ぎ澄まされた行動と知覚に強く依拠する。同時に、生物をとりすぎない技術水準にあり、資源の乱獲は本来的に起こりにくい。このように自然の見方や捉え方が漁撈採集の成果を左右していることを筆者は、マクタン島のウツボ釜漁、潜水漁、そしてホシムシやタツナミガイの採捕漁の調査から明白にした。

②と③に関しては、零細漁民の社会経済状態を大きく反映している。ビサヤ地域の零細漁民は、日々の生活が成り立つかどうかの瀬戸際にいる人びとが少なくない。マクタン島での筆者の調査によると、零細漁民の 1 日あたりの収入は漁撈採集の方法と個人差にもよるが、法定最低賃金 250 ペソ（約 500 円。2005 年時点）を上回することは少ない。さらに、漁撈採集による収入の低さは、食事調査の結果、とった魚介類による栄養はかろうじて足りているものの、野菜や穀物の栄養不足につながっていることが明らかとなった（辻 2018: 84）。よって、双系的な親族ネットワークを介した金品の融通や漁撈採集でえられた生物の分配が頻繁におこなわれている。干潟の生物は市場価値があり、しばしば市場にのぼる。ただし、干潟は干潮時であれば陸地からだれもがアクセス可能な空間であることから、漁場をめぐる競争が起きることがある。よって、干潟の生物を大量にとり、余剰を産み出すことは容易ではない。余剰にとほしいことから、零細漁民の間には身分関係が生じにくく、余剰のある上位の商人との間でスキ関係が構築されてきた可能性が高い。また、零細漁民の漁場利用は干潟にほぼ限定される。結果として、干潟には人びとが集中し、生物や環境

に負荷をあたえる。とくに、生物は商業的な収奪には脆弱である。とりすぎにくわえて、干潟でおこなわれるダイナマイト漁による沿岸生態系の破壊や、青酸カリを用いたアクアリウム用の熱帯魚の捕獲といった違法漁業も環境をおびやかす問題である。しかし、依然として、干潟は食料獲得のための持続的な空間として機能している。つまり、干潟の生態系は、破壊が進むいっぽうで、零細漁民の適切な洞察力や度を越さない慣習によって生産性を維持するトレードオフが成立していると考えられる。潮汐や潮流といった自然条件にくわえそれらによる視界や行動への制限もまた、漁撈採集を激化させない物理的要因であり、零細漁民と干潟との関係を調和する役目を担っているであろう。干潟の生産性が低下すれば、みずからの生計が成り立たなくなることを零細漁民が直感的かつ経験的にふまえているなら、それは資源や環境のワイズユースとして特筆に値する。

以上、ビサヤ地域の干潟における漁撈採集について、先行研究をレビューし、その特徴について明らかにした。本稿では、従来の先行研究および筆者のマクタン島での研究は、おおそ実態が重なる結果を示したことから、一側面ではあるが、ビサヤ地域の干潟での漁撈採集文化の特徴を描き出せたと考える。それは、干潟に寄り添って生きる零細漁民の身体的および生態的技能にもとづいた自然観の具現であり、干潟のめぐみを生活の基盤とすることで成り立っている文化である。結果、干潟での漁撈採集は、総じて零細漁民の生計を担保していると結論づけられる。

## 6. おわりに

ビサヤ地域の干潟における漁撈採集をトータルに理解するには、さらなる文献レビューと広域調査を要する。この点については本稿の限界であるが、本研究はまだ体系化されていないビサヤ地域における干潟の人類史に迫るうえで基礎的な資料と情報を示した。現在の干潟での漁撈採集の実態を示すことで、過去に人びとが干潟とその生物をどのように利用し、生計を成り立たせてきたかという人類史における海洋適応の問題にもアプローチが可能である。また、干潟での身体的および生態的技能に依拠した漁撈採集における人の行動と認知のプロセス、メンタルマップの解明に資することが期待できる。たとえば、干潟の生物をとることは、ホモ・サピエンスの環境利用の仕方の発達、漁撈採集の道具と技能の洗練のほか、貝殻で装飾品をつくり、物事を想像し、まわりの環境にさまざまな方法で働きかける認知能力の向上に役立ってきた可能性がある。

同時に、干潟および零細漁民の未来についても視野に入れておく必要がある。干潟は多くの貧しい人びとの食料獲得のための受け皿となっており、一部では環境破壊的な利用がおこなわれているが、零細漁民が糊口をしのぐ程度の生物を生産しつづけている。干潟の生産性を向上させるには、休漁期間の設定や特定の生物の資源管理をとおして、早期の効力ある対策が求められることは論をまたない。本点について、ビサヤ地域だけにとどめることなくフィリピン国内外の事情をまじえ、稿をあらため検討する必要がある。最後に、干潟は、漁撈採集に従事する零細漁民の生計を大きく左右する所与のライフラインであることを指摘し本稿をしめくくる。

## 謝辞

筆者は、ビサヤ地域をくまなく歩きまわり、漁撈採集に関する知見を蓄積してきた。その際、多くの零細漁民の方がたから貴重な情報をえた。とりわけ、セブ州マクタン島で多くのデータを収集した。なかでも、干潟での漁撈採集に同行させていただき、そのおもしろさを学ばせてくださったウツボ釜漁師 Ad 氏親子、潜水採貝漁師 Am 氏、ホシムシとタツナミガイの採捕者であった故 Ma 氏に感謝申しあげたい。

干潟の漁撈採集を特徴づける身体的および生態的技能の問題については、依然として不明な点が残る。ひきつづき、ビサヤ地域の干潟での研究を展開していきたい。

本誌の匿名の査読者の方がたには、草稿の不備を指摘いただくとともに、掲載に向けて適切かつ熱心な指導を賜った。

本研究は、おもに平成 17 年度笹川科学研究助成「フィリピン・潮間帯域におけるホシムシ類 (Sipunculoidea) の採捕と利用に関する人類学的研究」(代表者: 辻貴志) により可能となった。

以上、記して感謝申しあげるしだいである。

## 注

- 1) 「舟」と「船」のちがいについて、本稿では、零細漁民が漁撈採集で用いる小型のものを「舟」、商業漁業で用いられる中型・大型のものを「船」と便宜的に区別した。
- 2) 「技能」と「技術」という用語が本文では混在するが、「技能」は「行為・能力」、技術」は「知識」と簡単に区別しておく。
- 3) 本稿では、「漁業」は「大規模におこなう産業として利潤を追求した組織化された漁業形態」、「漁撈」は「小規模におこなう生計を支えるための漁撈形態」と簡略に区分しておく。

## 参考文献

(日本語文献)

- 野中健一 (2014) 「ホシムシはおいしい」 山下博由・李善愛編『干潟の自然と文化』神奈川、東海大学出版部、125-143.
- 野中健一・石川葉央・宮村春菜 (2003) 「人と生き物がつくりだす関係の諸側面—フィリピン・カオハガン島の事例—」『人文論叢』20: 133-143.



- ラファエリ, デイヴィッド・ホーキンズ, スティーヴン (1999) 『干潟の生態学 (下)』 (朝倉彰訳), 東京, 文一総合出版.
- 崎山克彦 (1999) 『何もない島の豊かな料理-南の小さな島カオハガン島には自然の幸がいっぱい-』 東京, 角川書店.
- 篠原徹 (2005) 『自然を生きる技術-暮らしの民俗自然誌-』 東京, 吉川弘文館.
- 高橋そよ (2018) 『沖縄・素潜り漁師の社会誌-サンゴ礁資源利用と島嶼コミュニティの生存基盤-』 東京, コモンズ.
- 田和正孝 (1981) 「パナイ島, カピス州サビアン島の漁業-パナイ島北部, サビアンにおける沿岸漁業の漁具・漁法-」 広島修道大学フィリピン調査プロジェクト編 『日本・フィリピン内海地域の比較調査報告-特に広島県とパナイ島を中心に-』 広島, 広島修道大学総合研究所, 52-63.
- 田和正孝 (2006) 『東南アジアの魚と人々』 京都, ナカニシヤ出版.
- 辻貴志 (2007 a) 「フィリピン・セブ州マクタン島におけるウツボ漁に関する調査ノート」 『人間文化』 **22**: 141-151.
- 辻貴志 (2007 b) 「フィリピン・マクタン島沿岸域におけるサルボとタツナミガイの採捕と利用」 『日本熱帯生態学会ニューズレター』 **68**: 6-12.
- 辻貴志 (2015) 「フィリピン・セブ州マクタン島における潜水採貝漁の事例報告」 『社会情報研究』 **14**: 63-79.
- 辻貴志 (2018) 「フィリピン・セブ州マクタン島における農産物の流通に関する調査報告」 『アジア地域研究』 **1**: 77-99.
- 辻貴志 (2019) 「タツナミガイ (*Dolabella auricularia*) の内臓の採取活動と食用慣行-フィリピン・セブ州マクタン島コルドヴァ町の事例-」 『人間文化』 **45**: 37-46.
- 矢野敬生 (1997) 「フィリピン・パナイ島における漁撈文化の諸類型」 『族』 **18**: 44-62.
- (外国語文献)
- Alcina, I. (2004) *History of the Bisayan People in the Philippine Islands: Evangelization and Culture at the Contact Period, vol.2*, translated by Kobak, C. and Gutierrez, L. Manila: UST Publishing House.
- Bucol, A. (2016) Diminishing Sustainability of Traditional Fishing Practices in Siquijor Island, Central Philippines. *SPC Traditional Marine Resource Management and Knowledge Information Bulletin* **36**: 3-12.
- Cadelina, R. (1986) Selected Artifacts from Three Islands in Region VII: A Documentation of Traditional Tools in the Visayas. Cadelina, R. and Perez, J. (eds.). *Artifacts from the Visayan Communities: A Study of Extinct Culture*. Dumaguete City: Siliman University, 203-276.
- Calderon-Hayhow, M. and Mascuñana, R. (1994) Fishing Material Culture of Fishermen in Barrio Ajong, Sibulan, Negros Oriental. Ushijima, I. and Zayas, C. (eds.). *Fishers of the Visayas: Visayas Maritime Anthropological Studies 1991-1993*. Quezon City: University of the Philippines Press, 393-464.
- De Guzman, A. (2015) Women in Subsistence Fisheries in the Philippines: The Undervalued Contribution of Reef Gleaning to Food and Nutrition Security of Coastal Households. *Women in Fisheries Information Bulletin* **29**: 34-40.
- Delan, G., Pepito, A., Asakawa, M., Yasui, K., Cunado, V., Maningo, A., Gonzales, A. and Rica, R. (2015) Partial Biochemical Characterization of Egg Masses of the Wedge Seahare *Dolabella auricularia* (Lightfoot, 1786). *Tropical Technology Journal* **19** (1): 1-6.
- Dominisac, J. and Rau, N. (1979) Long-Line Fishing in Cebu Channel, Cebu, Philippines. *The Philippine Scientist* **16**: 28-45.
- Garong, A. (2013) *Ancient Filipino Diet: Reconstructing Diet from Human Remains Excavated in the Philippines*. Cebu City: University of San Carlos Press.
- Junker, L. (2000) *Raiding, Trading, and Feasting: The Political Economy of Philippine Chieftdoms*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Kawamura, G. and Bagarinao, T. (1980) Fishing Methods and Gears in Panay Island, Philippines. *Memoirs of Faculty of Fisheries Kagoshima University* **29**: 81-121.
- Pepito, A., Delan, G., Asakawa, M., Ami, L., Yap, E., Olympia, M., Yasui, K., Maningo, A., Rica, R. and Lamayo, M. (2015) Nutritional Quality of the Egg Mass Locally Known as "Lukot" of the Wedge Sea hare *Dolabella auricularia* (Lightfoot, 1786). *Tropical Technology Journal* **19**: 1-6.
- Rau, N. (1979) Small-Scale Fishing Methods Used around Cebu City, Philippines. *The Philippine Scientist* **16**: 1-21.
- Rau, N. (1981) The Small-Scale Fishery of Mactan Island, Cebu Province, Philippines. *Philippine Quarterly of Culture & Society* **9**: 322-332.
- Schoppe, S., Gatus, J., Milan, P. and Seronay, R. (1998) Gleaning Activities on the Islands of Apid, Digyo and Mahaba, Inopacan, Leyte, Philippines. *The Philippine Scientist* **35**: 130-140.
- Scott, W. (1994) *Barangay: Sixteenth-Century Philippine Culture and Society*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Spoehr, A. (1980) *Protein from the Sea: Technological Change in Philippine Capture Fisheries*. Pittsburgh: University of Pittsburgh.
- Spoehr, A. (1984) Change in Philippine Capture Fisheries: An Historical Overview. *Philippine Quarterly of Culture & Society* **12**: 25-56.
- Szanton, D. (1971) *Estancia in Transition: Economic Growth in a Rural Philippine Community*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Szanton, M. (1972) *A Right to Survive: Subsistence Marketing in a Lowland Philippine Town*. University Park and London: The Pennsylvania State University Press.
- Tsuji, T. (2013) The Technique and Ecology Surrounding Moray Fishing: A Case Study of Moray Trap Fishing on Mactan Island, Philippines. Ono, R., Addison, D., and A. Morrison (eds.). *Pre-historic Marine Resource Use in the Indo-Pacific Region*. Canberra: Australian National University Press, 167-181.
- Tsuji, T. (2019 a) An Ethnography on the Wedge Sea Hare in Mactan Island, the Philippines. *Naditira Widya* **13**(2): 135-150.
- Tsuji, T. (2019 b) Gathering the Internal Organs of Wedge Sea Hare (*Dolabella auricularia*): A Case in Mactan Island, the Philippines. *People and Culture in Oceania* **35**: 127-130.

- Umali, A. (1950) *Guide to the Classification of Fishing Gear in the Philippines*. Washington : United States Government Printing Office.
- Umali, A. and Warfel, H. (1949) *Reef Fishing in the Philippines*. Washington : United States Department of the Interior.
- Ushijima, I. and Zayas, C. (eds.) (1996) *Binisaya nga Kinabuhi [Visayan Life]*. Quezon City : UP Press.
- Ushijima, I. and Zayas, C. (eds.) (2000) *Bisayan Knowledge Movement & Identity : Visayan Maritime Anthropological Studies*. Quezon City : UP Press.
- Wagey, B. and Bucol, A. (2016) Indigenous Ecological Knowledge (IEK) on the Utilization and Conservation of Coastal Resources in Siquijor Island, Central Philippines. *Ecology, Environment and Conservation* **22**(3) : 111-118.
- Yano, T. (1994) The Characteristics of Fisherfolk Culture in Panay : From the Viewpoint of Fishing Ground Exploitation. Ushijima, I. and Zayas, C. (eds.) . *Fishers of the Visayas : Visayas Maritime Anthropological Studies 1991-1993*. Quezon City : University of the Philippines Press, 3-51.
- Yano, T. and de la Peña, L. (1996) Small-Scale Fishing in the Muddy-Tidal Area of Capiz, Central Philippines. Ushijima, I. and Zayas, C. (eds.) . *Binisaya nga Kinabuhi [Visayan Life]*. Quezon City : UP Press, 171-177.
- Zayas, C. (2004) Atob and Bato : Two Sides of Philippine Lithic Heritage. *Pilipinas* **43** : 55-69.
- Zayas, C., Kawada, M. and de la Peña, L. (eds.) . (2014) *Visayas and Beyond : Continuing Studies on Subsistence and Belief in the Islands*. Quezon City : UPCIS Publications.